



延喜式祝詞諺解

中卷

特別
イ 4
3163
151(2)



貴  
14  
3163  
1370

# 水野秋彦撰述

# 延喜式祝詞諺解

## 悠紀廼舍藏版

延喜式祝詞諺解中卷目錄

一六月月次	壹
一大殿祭	三
一御門祭	十
一六月晦日大祓	十一
一東文忌寸部獻橫刀時咒	二十
一鎮火祭	廿一
一道饗祭	廿五
一大嘗祭	廿八
一鎮御魂齋戸祭	三十
延喜式祝詞諺解中卷目錄畢	





○神祇令云、季夏  
 月次祭、義解云  
 官祭、與祈年  
 祭同、即如庶  
 人宅神  
 祭也  
 ○又云季冬月次祭  
 ○又云前件云々其  
 祈年月次祭者百  
 官集  
 ○四時祭式云月次  
 祭六月十二月十  
 一日  
 ○又云月次祭奠  
 幣案上、神三百  
 四座、並大社一  
 百九十八所云々  
 右所祭之神、並  
 同祈年、其太神

延喜式祝詞諺解卷之中

常陸 水野 秋彦 撰述  
 讚岐 宮崎 康斐 校閱

○六月月次ミナツキノツキナミ ○六月十一日ノ月次祭ノ班幣ツキナミ (十二月シハスモ 准コレニ)

之ナラフ。十二月十一日モ此例ニ准ナラフフ實ハ月々執行フ祭故月次ツキナミト云フナレド歳ノ半ノ六月ト歳ノ終ノ十二月ニ班幣

スル例ト  
 ナレル也

集ウコナハレル侍ルカム神ヌシ主ハフ祝リ部トモ等モロモロ諸キコシメセ聞ト食ノル宣○此處全ク

宮高御魂神大宮  
女神、各加三馬一  
正云々  
年中行事歌合宗  
時朝臣歌云夏の  
くれ年の終に月  
毎のかへりまを  
らの神のみてぐ

祝詞ト同シ引合  
セテ心得ヘシ

高天原 爾 神留坐 上 皇睦神漏伎命神漏

彌命以 上 天社國社 登稱辭竟奉 上 皇

神等前 爾 白 久 皇神等ノ前ニ白スハ 今年 乃 六月

月次幣帛 今年ノ六月ノ十一日 十二月者云今年

十二月月次幣帛 十二月ノ班幣ノ時ニハ此詞ヲ替  
ヘテ今年ノ十二月ノ月次ノ幣帛

ト云 アカルタヘテルタヘニギタヘアラダヘニツナヘマツリテ 氏 色明カニ美シキ  
フ 明妙照妙和妙荒妙備奉 絹布光澤ノ照テ

清キ絹布絲ノ細ク精シキ和絹絲太 アサヒ 朝日 乃 豊榮 登 爾 全ク祈  
ク粗キ荒布ト云程ニ備ヘ揃ヘ奉テ

同シ引合セ スメミ マノミコトノ 能 宇豆 乃 幣帛 乎 同 稱辭  
テ知ルヘシ 皇御孫命

竟奉 久 登 宣 上 同

大御巫 能 云々 祈年祭  
に同シ

座摩 乃 御巫 辭 竟 奉 此の辭竟奉を祈年祭よ  
は稱辭竟奉と作けり

御門ミカド乃ノ御巫ミカムノコノ能コトナヘマツル辭竟奉○この辭竟奉も祈年祭

生島イクシマ乃ノ御巫ミカムノコノ能コトナヘマツル云々○この辭竟奉も祈年祭

辭別伊勢コトワケテ爾ニ坐云々マスマス白雲シラクモ乃ノ向伏限ムカブスカギリ  
此句を祈年祭の條

よは白雲能墜坐  
向伏限と作けり

御縣ミアガタ爾ニ坐云々マスマス祈年祭

山能ヤマ口坐云々クチニマスマス上ト

水分ミクマリ坐云々ニマスマス稱辭竟奉タ、ヘコトナヘマツラク久ト登モロモロキコシメセト諸聞食止ノル宣○

登○祈年祭條ニ乎  
トセリソレヨロシ

辭別云々コトワケテ祈年祭

○大殿祭オホドノホガヒ天子ノ御殿ヲ祝壽鎮ムル  
祝詞ガヒハギノ延言ナリ

高天原タカマノハラ爾ニ神留坐カムツマリマ須ス天上高天原ノ靈界ニ神ト貴スメラ皇親カムツ

神魯企神魯美之命カムロギカムロミ以テ氏○スメラガムツカムロギ天皇之親族神之君高皇產靈尊  
神之女天照大御神ノ御仲附ノ

古語拾遺云凡奉  
造三神殿者皆  
須依神之職  
齋部官率御木  
鹿香一鄉齋部  
伐以齋斧掘以  
齋鉏然後工夫  
下手造畢之後  
齋部殿祭門祭  
訖乃可御坐云々  
又殿祭門祭者元  
太玉命供奉之儀  
忌部氏之所職也  
云云

○真觀儀式云神祇  
官以三宮四合、一  
納玉一合納三切  
木綿一合納三酒  
資一居二八足案二  
脚、令三神部四人  
昇之中臣忌部  
官人、宮主、史生  
神部等、著二木綿  
左右相分至二延  
政門一置三案寶子  
上掃部寮之大舍  
人呼門如常圍  
司奏云大殿保賀  
比能事申賜牟宮  
內省官姓名叫  
門故申勅曰令  
申云々  
○宮内省式云、神  
今食新嘗二祭明  
日平日大殿祭、  
省輔已上、率二諸

忌部等、至三延政  
門、令二大舍人呼  
門、圍司傳宣、如  
常、輔入奏其詞  
曰宮内省申久、  
大殿祭此云於保  
大能保加  
比供奉神祇官  
姓名率忌部一候  
登申云々  
○講義云宜之ハ孝  
徳天皇紀に誨を  
ノタマシクと訓  
るを以てノリタ  
マハシクと訓べ  
し  
○今按にシハス  
の延言ならむか  
按に日嗣手の手  
と仁と受け國手  
の手は止と受た  
るにて仁も止も

御言ヲ  
以テ  
皇御孫之命 乎 天津高御座 爾 坐 氏 ○皇御  
孫尊

ト申ス尊稱ノ御初トマス邇々藝命様ヲ  
高天原ナル天之高御座ニ坐マサセテ  
天津璽乃鏡劔乎捧

持賜 天 ○天之璽ナル八咫鏡ト叢雲劔トヲ神之男君  
神之女君ノ御手ニ擎捧持テ遊バサレテ  
言壽古語

云許止保企言壽詞如今壽觴之詞 ○此言  
イヘリコトホギトイフハコトホギトゴトシイマノサカホガヒノコトバノコト

字ナ古語ニ許止保企ト訓ム許止保企ト云ハ今ノ世  
ノ酒壽ナドノ類ニテ事物ヲ稱賛テ祝スル壽言ナリ  
宣志久 ○御言ニ祝  
壽テ宣リ

給ヒシ スメラガウヅノ コスメ マノミコト スメラガウヅノ  
ヤウハ 皇我宇都御子皇御孫之命 ○皇之珍貴之御子  
皇御真御事ヨ

此乃 天津高御座 爾 坐 氏 ○此ナル天津高御  
座ニ御坐マシテ 天津日

嗣 乎 万千秋 乃 長秋 爾 ○天津日嗣タル天子ノ御位ヲ萬千秋  
ト數フル程ノ永久ノ秋マデ○平ラ

ケク聞 オホヤシマトユアシハラノミヅ ホノクニチヤスクニトタヒラ  
食シ 大八洲豊葦原瑞穂之國 乎 安國 止 平

氣久 所知食 止 ○大日本ノ古稱ニテ自万国ヘモ及ヘル大八洲豊ト  
美稱スル元國土ノ堅ル時葦ノ生タリシ葦原國天

照大神御依ノ稻穂ノ瑞ト美ク生ル國 (古語云志呂志女須)  
チ安國ト平安ニ知食御治ナサレト

此ノ所知食ノ三字ヲ古  
語ニ志呂志女須ト訓ム  
言寄奉賜 比 氏 ○其事ヲ皇御孫命ヘ寄セ  
奉リ御任シ遊バサレテ

共に平氣久所知  
食の語へかゝる  
格なりなほさ  
に見過すべから  
す

講義云食國之用  
もていひ天下は  
体もていへり

按に今てふ詞は  
自ら上に神代の  
事をいへるに對  
へり

をど共に汝屋船  
命の句へかゝる  
こと祈年祭御年  
皇神祭中なる格  
も同し  
按に今てふ詞は  
自ら上に神代の事  
をいへるに對へ  
り

按に御殿の下へ  
手のテニナハを  
添ふへき事上の

以天津御量 氏○天之御謀ヲ以テ○穗日 命命ヲ始度々ノ御使有テ 事問之 磐根

木根立 知草能可岐葉 乎毛言止 氏○言語スマ シキ物ニ

テ言語暴ビタリシ岩石ヤ木根立即チ 天降 利賜比志 食國

天下 登○天降遊ハサレタ食ト御身ニ享ケ 天津日嗣所知

食須 皇御孫之命乃御殿 乎○天之日嗣ノ御位ヲ享ケ知 食ス皇御真之御事即天子

御在所チ 今奥山乃大峽小峽爾立留木 乎今眼 前山

奥ノ大ト廣イ山間小ト 齋部能 齋斧乎以伐採 氏○齋部ノ 齋清タ

ル斧ヲ以テ伐初チシテサ 本末 乎波山神爾祭 氏○木ノ本 ト末ハ

山ニ殘シテ山祇ニ奉リテ謝 中間 乎持出來 氏○木ノ中間ノ處 ナ材木トシテ

山ヨリ持 齋鉏 乎以氏 齋柱立 氏○齋部ノ齋清メタル鉏ヲ 以テ穴ヲ掘リテ齋柱ト

テ重ク大切 皇御孫之命乃 天之御翳日之御翳

止○天皇様ノ天ヲ蔽フ真蔭 造奉仕 禮流瑞之御殿 始○齋部 日ヲ遮ル真蔭トシテ

御殿手の處にいへるか如しさて上の乎も此處のを共み汝屋船命へかゝる事も既いへるが如し講義云船は大根と申す稱名みて云々  
◎此の爾は次の言壽鎮白久の句へかゝる

○祈年祭條云皇神能敷坐下都磐根爾宮柱太知立云々

諸工等ガ造作仕奉タミツミツト  
清潔美麗ノ御殿即御在所カチ  
**(古語云阿良可)**此ノ殿ノ字チ古語ニ阿良可

ト訓 **汝屋船命** 爾 **天津奇護言** 乎  
○汝即御坐屋大根之御事ニ

フルゴトニイフ **(古語云久須志伊波比許登)** 此ノ奇護言三字チ古言ニ久須志伊波比許登ト

訓 **以** 氏 **言壽鎮白** 久 **言ニ述ベ**  
○天之奇妙護言ト稱スル古代ノ祝詞ノ祝言ヲ以テ

御殿ヲ鎮 **此** 乃 **敷坐大宮地底津磐根** 乃 **極美**  
メ白スハ

此ノ屋船命ノ領知マス御所即大宮地ノ宮柱ヲ掘入タル底之岩石ノ深イ極處マデ **下津綱根** 下之綱根即綱ニテ結堅

下 **(古語番繩之類謂之綱根)** 古語ニハ後ノ世彼ト是ト番ノ處ヲ結合スル類

ノ處チサシテソレ **波府虫** 能 **禍無久** 高天  
ナ綱根トイヘリ

原 **波青雲** 乃 **靄久極美** 宮ノ千木ノ聳タル天空ハ青雲即空氣ノ蒼々ト立靡テ見ユル極處マデ

天之血垂 **飛鳥** 乃 **禍無久** 空飛鳥ガ毒糞ナル煙出ヨリ

入テ害チナ **掘堅** 多 **留柱桁梁戸牖** 乃 **錯比** (古語) 毒物ナド落シ

云 **伎加比** 此錯ノ字チ古語ニ伎加比ト訓ム **動鳴事無** 久 **底之石マテ掘入** レテ突堅タル柱



ト桁ヤ梁ヤ戸牖等ノ彼レト是レト來交組合フ  
錯ノ處動キ鳴リテギシギシトガタツク事ナク  
引結幣魯葛目能

緩比取葺計魯草乃噪岐(古語云蘇蘇岐)

此ノ噪ノ字ヲ古語無久○上ニモ綱根ト云ヘル如ク番繩ニテ結タ結目ノ  
ニ蘇蘇岐ト訓ム 緩ヤ御屋ヲウケ葺イタ萱ガソ、ケ亂レテガサ

々々ソ、御床都比能佐夜伎夜女能伊須須

支伊豆都志支事無久○晝御座ノ大御床之邊ニ坐ス時御心  
ノ騷カシキ事ヤ夜御殿ニ御寐坐テ

夢ニ侵サレ給テイソイソ驚平氣久安久奉護留神御名  
給様ナイツ々々シキ事ナク

○講義云床都比の

比は海邊濱邊な

どの邊

○又云御床都比云

々は晝御座云々

夜女能云々は夜

御殿の事よて云

々

○後釋云伊豆都志

伎は御床都比と

夜女能云々二を

受て云ふ

乎白久○平カニ安カニ幸奉テ凶事ヲ忌避ツ屋船久久遲命○

屋大禰莖之父之御事即是木靈也此ハ木靈ニ坐ス御名ノ義屋船

豐宇氣姫命登是稻靈也俗謂宇

賀能美多麻此レハ稻穀ノ靈ニ坐ス今世間ニ此今世産屋

以辟木束稻置於戸邊乃以米散屋中之

類也今世産室ヘ兇物ヲ入レシトテ拆木ト束稻トヲ戸ノ邊ニ備ヘ置イテ

○按に上の言壽鏡  
白久の白久を此  
前にて結ふへき  
を詞を續け此處  
に白久を重ねて  
上のを結すてこ  
り心をつけて見  
るべし

○按に屋船豐宇氣  
姫命は此處には  
屋船草野姫命な  
ど申すへきを猶  
本靈の御名に豐  
宇氣姫と申しこ  
るゆゑよしは史  
傳まゝ講義等の  
説あれど此處に  
掲げかゝし略解  
に就て見るべし

◎上の御名乎白久  
を此處の御名乎  
波奉稱にて結ひ  
て直に氏にて下  
句へつ、けり

ニテ家屋ノ護モ其幸靈タル木  
草ノ二靈ヲ兼子給ヘル故ナリ  
御名乎波奉稱利氏○御名ナバ  
稱賛シ申

皇御孫命乃御世乎○天子様ノ  
御壽命ヲ堅磐常磐爾奉

護利○堅磐ノ如クニ常磐  
ノ如クニ護ヒ奉リ五十樞御世乃足良志御世

爾○茂大ノ御壽ノ  
充足ノ御命ニ田永能御世止奉福爾依○足長  
ノ御

壽命ト幸之齋玉作等ガ  
○齋清マリ居ル玉持齋波利持淨

奉ルニ依テ我  
○齋清マリ居ル玉瑞八尺瓊

◎後釋云齋玉作の  
齋は作る人に係  
れる詞なり

能御吹伎乃五百都御統乃玉爾○ミツ々々ト美キ  
瑞彌眞明瓊ノ御

祝壽ノ料ノ五百箇御統トアカルニギヲ  
フルゴトユイフ明和幣古語云爾伎氏和幣二

言ニ爾伎タルコギ  
テチツ曜和幣乎附氣ケ  
テ氏○明ト色ノ美キ精細布照ト光澤  
ノ宜キ精密布ヲ附テ幣トシ齋

部宿禰某我弱肩爾太襪取懸テ  
○齋部宿禰名ハ  
某ガ屈伸自在

ニ連續セル柔肩ニ太手助ヲ取言壽コト  
ホ伎鎮奉事能漏落武

事乎波○奇護言ニ言祝テ大殿ヲ平安ニ鎮メ奉ル言ト神直日命

◎姓氏錄云齋玉作  
高御魂命孫天明  
玉命之後也  
○臨時祭式云凡出  
雲國所進御富岐  
玉六十連三時大  
殿祭料三十六連  
臨時二十四連每  
年十月以前令意  
宇郡神戸玉作氏  
造備差使進上

此の白は上に白久といひて其を結へるに非ず上に白久といふ詞二處あれど其は既に結ひ棄されは此處にて更に結ふ例には非これ別に一格なり  
 ○古語拾遺云爰令天手力雄神引啓其扉遷坐新殿云云令大宮賣神侍於御前是太玉命神如今世内侍善言美詞和二君

大直日命聞直志見直志氏○神直靈之御事大直靈之御事ノ二神ノ凶事ヲ吉事ニ

取直直シ給フ御恩靈ヲ以テ言ノ漏平良氣久安良氣久所

知食登白○此ノ大殿祭ノ壽言祭事ヲ平ラケク安ラケク知シ食セト白ス

詞別白久○詞ヲ別テ白ス大宮賣命登御名乎申事波○

大宮之女命ト此大殿祭皇御孫命乃同殿能裏爾塞

坐氏○御名ニモ大宮之女ト稱奉ル如ク天皇様ノ同御殿内ニ兇物防衛ノ爲メ塞在坐シテ參入罷出人能

○選比所知志○御所へ參入り御殿ヨリ罷出ル人々ノ性質行狀等ヲ撰ビ監視シ知シ食シ○此處人ヲ云

神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志

古語云夜波志和志二字ヲ古言ニ夜波志ト訓ム坐氏○崇神禍神ナドノ勇進

善言美詞ト稱スヘキ言モテ直シス皇御孫命皇御孫尊即天子様ノ朝乃

御膳夕乃御膳供奉流○朝ノ供御夕ノ供御比禮懸

伴緒襁懸伴緒乎○領巾ヲ掛テ御事ニ預奉ル采女ノ群ノ長手助掛テ御膳ノ事ニ供奉スル膳夫ノ群ノ長

臣間令宸襟悅懌也  
 ○按よ次の御門祭の文には參入罷出人名乎問所知とあるを此處にた、人能どのみあるは文字の脱たるなり此處も同じく名乎の二字かとも思へど定かねたればまづ○を記し置て解は大かた名乎とありけむと推量りて施せり

○按に正訓に不令  
在をアテシメス  
と訓たれといか  
、とれはゆれば  
訓を改めつ

○講義云己乖々は  
各なり手躓足躓  
は過なり

手躓足躓(古語云麻我比)躓ノ字ナ古語ニ  
不令

為氏 手ノ躓足ノ躓ナドノ不敬  
親王諸王諸臣。百官人

等 乎 ○皇族タル親王等大臣公卿  
己乖乖不令在 自分  
分ノ心

心ノ向キ向キニシ  
邪意穢心無久 ○邪心穢心ト君朝廷ニ背キ  
奉テ不忠ニモ謀反ナト企

ツル様ナル  
宮進 米爾進宮勤 爾勤之米氏  
一向ニ宮  
即御所へ

ノミ進マセニ令進只管ニ朝廷  
咎過在 乎波見直志 聞直  
即宮へノミ勤メニ勤メサセテ

坐 氏 ○若シ戒メテモ慎ミテモ自然ニ咎ヲ犯シ過ヲ爲ス事ノ有  
平良氣  
ンナバ御目ニハ善キニ見直シ御耳ニハ宜キニ聞直坐テ

久 安良氣 久令仕奉坐爾 依 氏 ○朝廷へ平ラケク安ラケ  
ク仕ウマツラセ下サレ

テ御出マ  
大宮賣命 止御名乎 稱辭竟奉 久登白 ○  
スニ依テ

大宮之女之御事ト其御功德  
ノ御名ヲ稱賛シ奉ルト白ス

○御門祭  
大殿祭ニ附キテ  
ノ御門神ノ祭

櫛磐 牖豐磐 牖命 登御名 乎 申事 波  
奇岩真門之  
御事豐岩真

○講義云祝詞式  
此詞をかく別條  
の如く記された  
れども其式は大  
殿祭に隸て共に  
行はる、事よて  
眞には其詞別の  
如くなるもれ也  
古語拾遺云、于  
時天照大神、云

云爰令天手力雄  
神引啓其扉、遷  
坐新殿則天兒屋  
命太玉命、以日  
御綱、廻懸其殿、  
云々豐磐間戶命、  
櫛磐間命二神、  
守衛殿門  
◎此處の氏もじは  
次の數句を隔て  
て自上往波云々  
の句の處へかけ  
て見るへし

門之御事ト御名ヲ稱ヘテ此  
大殿祭ニ稱賛シ奉ル故ハ  
四方内外御門爾○御所ノ四方ノ内  
重外重ノ御門ニ

如湯津磐村久塞坐氏○五百箇ト多クノ磐群ノ堅固ナ  
ル如ク防衛ノ爲ニ塞在坐シテ

方四角與利疏備荒備來武天能麻我都比

登云神乃言武惡事爾(古語云麻我許登)

惡事二字ヲ古言ニ  
麻我許登ト訓ム  
相麻自許利相口會賜事無久○

東西南北ノ四面ハ勿論東北東南西南西北等ノ四隅ヨリ御門モ經ズシテ疏暴  
比來ントスル天之禍之靈ト言フ禍神ガ言誘ス禍惡言ニ相交結相口令合結

フ事ナク○會ハアハセナ  
リヘノ假名ニ心ヲ附ベシ  
自上往波上護利自下往

波下護利○禍神ガ御門ノ上ノ虚空カラ通行バ上ヲ守リテ入ラシメ  
ズ御門ノ下ノ地中ヨリ往來バ下ヲ守リテ入ラシメズ

待防掃却言排坐氏○若モ來ナバト待設ケテ來レハ直ニ排  
ヒ遣リ言ニ言伏セ退之ツ、坐シテ

朝波開門夕波閉門氏○朝ニハ天子ノ御爲メニ御門ヲ  
開キ夕ニハ御門ヲ閉テ、○

此レハ其官アリテスル事ナ  
レモ守護ノ上ニ就テ云リ  
參入罷出人名乎問所知志

參入退出ノ諸人ノ姓名ハ勿論其行狀  
心中マデノ事ヲ問糺シ知シ看シテ  
咎過在平波○御所奉仕ノ人  
ノ身ノ上ニ若

○接し大殿祭の三篇之本注多く本文處々にて斷れ九れば初學の人は熟く讀度し難かるべし故先(カレバ)の印せる注文の處々を除きて本文を誦つて後、後に本注を讀むへし然(シテ)されは文章の脈勢を覺り難かるへし

○神祇令云、凡六月十二月晦日大祓、謂祓者解(トキ)東西除不祥也

文部上ニ祓刀云云訖百官男女聚集祓處、中臣宣(トキ)祓詞、下部爲解除、  
○太政官式云、凡六月十二月晦日、於宮城南路、大祓、大臣以下五位以上、就(トキ)朱雀門、辨史各一人、率中務式部兵部等省中見參人數百官男女、悉合祓(トキ)之、臨時大祓亦同、  
○後釋云、天皇朝廷爾と云より一段之文殊に古くいといとめでたしこれ上代より百官の大祓の時加へ

モ咎ヤ過(トキ)ア  
神直備大直備(トキ)爾  
神直靈大直靈ノ神ノ見直(トキ)見直

聞直坐(トキ)氏  
見ユル事ハ見直シ聞ユ  
平良氣久安良氣久

令奉仕賜故(トキ)爾  
平ラケク安ラケク不調法ナク  
豐磐(トキ)牖

命櫛磐(トキ)牖  
命登御名乎稱辭竟奉久登白(トキ)白

豐岩真門之御事奇岩真門之御事ト其御功德ノ顯ハレタル美名ヲ稱へ申ス頌辭ヲ竟へ究ハメ奉ルト白ス

○六月晦日大祓  
六月晦日大ト廣ク朝廷ヲ始(トキ)始  
天下中ノ罪穢ヲ拂フ祓ノ詞(トキ)詞

月准之  
十二月晦日大祓式ノ詞モ之レニ准フ

集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食

宣  
ウゴメキ並ビ在ル親王等王等臣等百官諸司ノ人々女官等ニ至ル迄ノ諸人聞取ラレヨト先ツ一言申渡シ宣リ聞カス  
○古文ニハ此條

ハナカリシナ後ニ加ヘシ物ナル事後釋ニ云ヘリ

天皇朝廷爾仕奉留  
天皇之朝廷比禮挂伴男  
領巾

手襪挂伴男  
手助ヲ掛テ供御ヲ調  
鞞負伴

て宣りし詞なる  
へし云々  
○後釋云四の伴長  
を擧たるは多く  
の中に少か摘  
出て云古文の例  
にて是に諸の伴  
長をこめたり次  
文にて知るべし  
○同書云犯とは慎  
みてすまじき事  
を慎まざる等閑に  
大ろかにするを  
云てればかそ也  
○零解云今按よ字  
鏡に憎憎也手加  
志とわれは於の  
假名には非ずさ  
ればはほかすの  
意とは爲難し  
○今按に此二説何

れ當れりや定め  
かねたれば此處  
のみ犯字を字の  
まに出しつ  
○後釋云高天原爾  
と云より下の祓  
詞は諸國の大祓  
の祝詞なるを朝  
廷百官の大祓に  
も兼用られたる  
ものあり

男 劔佩伴男

○劔ヲ負ヒ弓ヲ執テ守衛ニ仕フル部長劔ヲ佩テ警固ニ仕フル部長即六府武官ノ類

伴男

乃 八十伴男

○其外部長ト云フ部長ノ八十ト數多ノ伴長即百官ヲ始トシテ

官

官 爾 仕奉 留 人 等

○官省寮司等ノ諸役所諸官員ノ附屬ニテ奉公スル諸人等ガ

過

犯 家 牟 雜 雜 罪

○心ノ外ニ過テ犯シタリケン種々様々ノ罪事ヲ

今年六月

晦之大祓

○今年六月ノ月隱ノ義ナル晦日ノ大祓ノ神式ニ

祓給 比 清給事

乎 朝廷ヨリ祓ヘナサ

諸聞食止 宣

衆之諸之ノ人能ク聞シ看シ心得ラレヨト宣リ

聞カ

高天原

爾 神留坐 ○天上高天原ノ神界ニ神鎮坐マス

皇親神漏岐

神漏美 乃 命以

○天皇之親族トオハシマス神之男君神之女君仰二方ノ御言即命令ヲ以テ

八

百万神等

○八百方ト至極多數ノ天之神方ヲ

神集集賜

比 ○神ト尊クモ尊キ神

神議 賜

○神ト畏クモ尊キ神様ヨリ神等へ御諏リニ御議遊ハシテ

我

皇御孫之命

○我が皇孫タル皇御眞之御事即邇々藝命ハ

豊葦原 乃 水穗

○依志のサシハセ  
の延言

○國中のヌハニウ  
の約言

○問志のハシハヒ  
の延言

○後釋云神攝云々  
は荒振神に係り  
神問云々はむね  
と大穴持神に係  
れり云々

○按盤座放は皇  
御孫命を盤座よ  
り離ちの意にと  
あらで盤座を高  
天原より放ちの  
義なるべしそは  
大殿祭の詞に皇  
我 宇都御子皇御  
孫之命此乃天津  
高御座 爾坐 天  
津日嗣云々所知  
食止言寄奉賜此  
氏とある此乃  
た坐氏てふ詞よ  
ても知られたり  
○考云これよりは  
神武天皇このか  
たの御代を申せ  
り下れ條々もし  
かり  
○日高見の解後釋

國 乎 ○豐ト稱美スル大日本ノ古稱葦原ヨ  
リ固成シ美稻ノ生スル瑞穂國ナ  
安國 止 平 久 知所

食 止 事 依 志 奉 枝 ○ 靜謐無事ナル安國ト平安ニ領知シ政治シ  
テ知シ食セト其事ヲ皇孫尊ヘ寄任奉リ遊

如此 依 志 奉 志 國中 爾 荒振神等 乎 波 ○

斯様ニ寄任奉ツタ國中ニ住ミテ  
暴動ビ立テ居ル兇惡ノ神等ヲバ  
神問 志 爾問 志 賜神掃

掃賜 比 氏 ○ 御勅使ヲ以テ大穴持神ニハ神ト尊ク御問糺ニ問糺シ遊  
ハシ邪神ヲバ神ト畏ク掃除ニ穢退ツ御退治遊バシテ

語問 志 磐根樹立草之垣葉 乎 毛 語止 氏 ○

邪神ノ暴ビニ感セラレテサカシゲニ言語シタ岩石  
木ノ切株草ノ片葉等ノ波及ノ兇物迄ヲ令言止テ  
天之磐座放 ○ 天之  
磐座

即高御座ヲ高 天之八重雲 乎 伊頭乃千別爾千別  
天原ヨリ令離

氏 ○ 御天降ノ天路ニ霏ク天之彌重雲ト重レル雲  
天降 依 志 奉 支 ○  
チ稜威ト畏キ御神威ヲ以テ道排ニ道排テ

皇天二祖ノ神様ガ皇孫ヲ天降  
シ此國ヲ皇孫ニ寄附給ケリ  
如此 久 依 左 志 奉 志 四方

之國中 登 ○ 斯様ニ寄セ奉ツタ皇國ノ東  
西南北四方ノ國ノ中央トテ  
大倭日高見之

國 乎 安國 止 定奉 氏 ○ 大ト美稱スル大和ノ廣々トウチ開ケ  
テ山遠キ故ニ日ガ空ニ高ク見ユル國



に依れり

ナ是レツ安國ノ美國オホキミヤマトコ下津磐根ツツイハチ爾宮柱太敷立ニヤハシラフトシキダチ○大宮處オホミヤトコロト大宮所ニ定奉テ

石ニ届ク程ニ掘入レテ宮柱ヲ太フ高天原タカマノハラ爾千木高知チギダカシリ氏テク立テ○其柱ノ太カ如ク太知領

高天原即天之眞空ニ搏風ヲ舉テ皇御孫之命乃美頭乃スメミマノノミコトノノミヅツノ○其千木ノ高ガ如ク高知領テ

御舍仕奉ミアラカツカヘマツリテ氏ミ○天子様ノ瑞ト清潔美麗ナ御在所即御天之御アメノミ殿ヲ御普請掛ノ人々ガ造作仕マツテ

蔭日之御蔭止カゲヒノミカゲト隱坐カクリマシ氏テ○其御殿ヲ天子様ガ天ヲ蔽フ眞蔭マコト日ヲ隔ル眞蔭ト遊ハシ其内ニ隱

御出遊ミイデ安國止平氣久所知食武國中爾成ヤスクニトダヒラケクシロシメサムクヌチニナリバシテ

出武イデム天之益人等アメノマスヒトラ我ガ○安國ト平安ニ何時マデモ知シ食シ領治ヤスクニイデマデモシメサムクニシテシ給ハントスル國中ニ斷絶スル世ナク

生リ出ナ天之益人即天神造化ノ恩德アメノマスヒト過犯アヤマチオカシケムクサグサノツミ家牟ケム雜雜罪事サツサツツミ波ハ○ニ因テ日々ニ數益ス天下ノ万民ラカ

心ノ外ノ仕損ニテ過テ犯シシ天津罪止アマツツミト畔放アハナチミツ溝埋ウメ樋放ヒハナチ○タリケン種々色々ノ罪事ハ

頻蒔シキマキ串刺クシサシ生剝逆剝イケハギサカハギ尿戸ケツ許許太久ココダク乃罪ノツミ○シキマキクシサシイケハギサカハギケツアハナチミツウメヒハナチ

乎天津罪止ナアマツツミト法別氣氏ホリケテ○高天原ニテ素戔嗚尊ヨリ起シ天之罪オホソリト云ハ田ノ畔ヲ放テ界ヲ亂リ水ヲ涸カヒ

シ溝ヲ埋テ水路ヲ斷樋ヲ放テ湛水ヲ無用ニ洩シ種ヲ二度蒔シ田底ニ串サシシテ田人ヲ困セ生駒ヲ逆ニ剝尿ヲ大嘗宮ニヒリ如此類幾許出ル罪ヲ天之罪ト

○後釋云諸の罪條の中には自ある穢又自ある災なども有る過犯とは云可らざるふ似たれどもこは然委く事を分て云べき所にも非れば姑過犯る罪に附ても云べく云々  
○講義云拾遺は逆剝生駒とある如く生てある駒の皮を逆さまに剝ながら其任よ生せ置て苦しむるを云なり  
○古事記云於聞食大嘗殿屎麻利散

後釋云閉は閉理の理を省ける言也云々

略解云今按み龜相記といふ物み白人は白禿白癩古久美は癭腫之類と云へり

後釋云上なるは先母に娶へるは犯し非すして後み其子にも連ねて奸くるが犯なり下なるは先子みあへるは犯し非すして後み其母も奸くるが犯なり云々

後釋云文選東方朔が文み以筵撞鐘とある注み筵ハ小木枝也と云へり云々  
接座は幣帛のシラミテ物品を指す稱なるべしされはシは種品などのシ又俗み五目飯み入る、シ物ノシなどいふシみてテは助語ならむ

罪名ヲ宣リ 國津罪 止ハ國之罪即國人ノ 生膚斷死膚

斷白人胡久美 生タ膚ニ疵ヲ附ケ死ダ膚ニ疵ヲ附ル穢ノ類ノ穢キ罪 己

母犯罪已子犯罪 己カ生母ヲ犯シタル罪已 母與子

犯罪 先ツ人ノ母タル女ニ娶テ 子與母犯罪 先人ノ子タル女ニ娶テ次ニ

畜犯罪 飼物即馬牛等ノ家 昆虫乃災 這蟲即蛇 蜂百足等

高津神乃災 高即空ヲ飛アリク 高津鳥災 高即空ヲ飛ブ

恠鳥ノ災 畜仆志 蠱物爲罪 牛馬等ヲ俄ニ死ス畜令斃ノ術ヲコ 施シ人ヲ咒咀蠱術ヲ施セル罪 許

許太久乃罪出 武國民ノ犯罪ヲ探求メバ許 如此出波

天津宮事以 氏 高天原ノ天之宮ニ始リシ 大 中之臣ガ

天津金木 乎本打切末打斷 氏 天之細木

千座置座 爾置足 波

天津菅曾 乎本刈斷末刈

○天降の解は後々  
釋の説み據れり  
次の地之祇は天  
之神と相會云々  
の解もしかり

切氏キリテ○八針ハハリ爾取辟ニトリサキ氏テ○大之管アマツスガ眞緒マコト即緒ニ割テ用ルル天之管アマツスガヲ本チヲ  
刈斷カキ末ダテヲ刈切カキテ中程ナカマノ佳ヨキキ處トコロヲ彌針ハハリ針ニト幾イ

針ハハリニモ取割トリイテ眞緒マコトニ爲ナシ天津祝詞アマツノリト乃ノ太祝詞事オト乎チ宣ノ  
テ○身ミノ罪穢ツミヲ打拂ウチハラフテ

禮レ○天之諄辭アマツノノリノ太諄辭オホノリト甚イモ尊モトク如此カ久ク乃良ノラ波ハ○斯様オホナカニ大中臣ナカナカ  
ク尤モトメデタキ祝詞ノリヲ宣ノ

天津神アマツノカミ波ハ○天之アマツ磐門イハト乎チ押披オシヒラキ氏テ○天之國アマツノクニノ磐イハト堅固ツヨク  
神カミハ

開ヒライ天之八重雲アマノヤヘノクモ乎伊頭イヅ乃千別チワキ爾千別チワキ氏テ  
テ

所聞食キコシメサム牟ム○天路アマチノミチニ霏フキク彌重雲ヤヘノクモヲ稜威リョウイト畏カシコキ御勢ミケセニ道排ミチハキニ道排ミチハキト押分オシワケ  
ツ、高山短山タカヤマヒサヤマノ峯ミネナドニ天降アマノ坐イマテ其諄辭ノリト式カタトヲ聞看ミサ

國津神クニツツカミ波ハ○地之祇チノツカミハ高山之末タカヤマノスエ短山之末ヒサヤマノスエ爾上ニノボリ  
サ

坐イマ氏テ○高山タカヤマノ峯ミネヤ短山ヒサヤマノ峯ミネニ登ノボリ集ツドヒ高山之伊穗理短山タカヤマノイボリヒサヤマ  
坐イマテ天之神アマノカミト相會アヒシ給タマヒテ

之伊穗理イボリ乎撥別チカキワケ氏テ所聞食キコシメサム武ム○聞給ミコトタマヒフ御耳視ミミ給タマフ御  
目メノ隔ヘダテタル高山タカヤマニ立タ

ル雲霧短山イボリヒサヤマニ立タル雲霧イボリヒサヤマヲ搔カキワケテトツクリト聞ミシ看ミサレウ如此所聞食カクキコシメシ氏テ波ハ○斯様オホナカニ天神カミ  
ケテトツクリト聞ミシ看ミサレウ

ノ事コトヲ聞召キコソビ皇御孫スメミマ之命ノミコト乃朝廷ノミカド乎始ハジメ氏テ○上ウヘハ皇御眞スメミマ  
タナラハ

子ミコノ朝廷ミカドヲ始ハジトシテ天下四方國アマノシタモノクニ爾ニ波ハ○下シタハ天下中四アマノナカノナカ罪止ツミト云イフ布フ  
始ハジトシテ

此止もじは下の遺罪波不在止の止と共み被給比清給事乎の句へかゝる  
 神代記云我所生之國唯有朝霧而  
 蕪滿之哉乃吹撥之氣化爲神号曰級長戸邊神亦曰級長津彦命是風神也  
 講義云科は息長云々神名の志那都比古神また級長戸邊命の都も戸も共み處の義なるへく覺えたり云々此科戸と云るは級長處なるが云々級長

戸の風のと云れバ風の名も非ず風となるべき氣を級長と云ひ其迫りて動き進むをなむ風とは云るなるべき云々  
 万葉集云夜伎多知遠刀奈美乃勢伎  
 按此處の譬論四つははなつどはらふとを以て互み對せり

罪波不在止  
○罪ト名ツケ云ベキ限リノ罪ハ皆消失テ殘ハ不有ト  
 科戸之風乃

天之八重雲乎吹放事之如久  
○息長處ニ吹立ツ風ガ天空ノ彌重雲ナ

離離ニ吹放テ遂ニハ消失シムル朝之御霧夕之御霧乎  
事ノヤウニ○罪穢ヲ祓去ル譬ノ一

朝風夕風乃吹掃事之如久  
○朝立ツ眞霧夕立ツ眞霧ヲ朝風夕風ガ殘ナク吹

拂テ消失シムル事ノヤウニ○罪穢ヲ祓去ル譬ノ二  
 大津邊爾居大船乎舳解放

艦解放氏大海原爾押放事之如久  
○大津邊即廣イ船着所ニ

泊リ居ル大船ヲ舳綱ヲ解放シ艦綱ヲ解放シテ渺々タル大海  
ニ押シ出シ其津ヲ離ツ事ノヤウニ○罪穢ヲ祓去ル譬ノ三  
 彼方之繁

木本乎燒鎌乃敏鎌以氏打掃事之如久  
○彼方

ト見渡ス所ノ繁木之本即繁立テル細木ヲ刃ヲ燒タル鎌ノ銳鎌  
ヲ以テウナ梯ヒ刈リ棄ル事ノヤウニ○罪穢ヲ祓去ル譬ノ四  
 遺罪波

不在止  
○一トシテ殘リ留ル罪ハ不有ト  
 祓給比清給事乎  
○朝廷ニテ祓之タマヒ清

高山之末短山之末與里  
○天神地祇ノ此事ヲ聞召シタル高山之峯短

山之峯 佐久那太理爾落多支都速川能瀬坐  
ヨリ

○後釋云瀨織は瀨下みて彼伊邪那岐神の於中瀨墮迦豆伎給ふと古事記にある意の御名也倭姫命世記に荒祭宮一座皇大神荒魂伊弉那伎大神所生神名八十枉津日神也一名瀨織津比咩神是也とあり云々  
○同云ことかの御禊段み生坐る伊豆能賣神なり云々即速秋津日子速秋津日女と同神なり秋と明の假字にて明と御禊に由りて清まるとる由の御名

○同云倭姫命世記に多賀宮一座豐受大神荒魂也伊邪那岐神所生神名伊吹戸主神亦名神直日大直日神と見えたり多賀宮は伊勢外宮別宮なり是を豐受の荒魂と云るは心得ぬと氣吹戸主神を直毘神なりと云るは古き傳説なるべし此處に正しく叶ひていと尊し  
○零解云今按に御鎮座傳記に伊弉諾尊到筑紫日向小戸橋之穩原而被除之時云々亦

須○真曲垂ト岩間谷合ナドヲ過テ水勢瀨織津比咩止云神  
烈ク落激ツ急流川ノ湍ニ坐マス

大海原爾持出奈武○瀨下之靈女ト云神第一番ニ祓之物ニ添テ流シタル罪穢ヲ受取テ速川ノ水

ト共ニ大海原ニ如此持出往波○斯様ニ持出シ荒鹽之鹽  
持出シ去ナン

乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾座須

速開都比咩止云神○荒潮ノ潮ノ彼方ノ潮道此方ノ潮道ノ八百ト數多キ潮道ノ彌鹽道ガ八百會

ト一處ニ集リテ海底へ卷入ル處ニ坐ス勇明之靈女ト云神持可可吞氏牟○第二番ニ其罪穢ヲ受取テカツカツ

ト音立テ口中如此可可吞氏波○斯様ニカ、氣吹戸坐須  
ニ吞込テン

氣吹戸主止云神○息吹處ニ坐マス息吹處主ト根國底  
イブキドスシトイフガミ

之國爾氣吹放氏牟○第三番ニ其罪穢ヲ受取テ罪穢ノ生ズル如  
ノクニニイブキハナチテム

此久氣吹放氏波○斯様ニ氣吹放テ罪穢根國底之國爾  
此久イブキハナチテバ

坐速佐須良比咩登云神○根國底國即黃泉ノ國ニ坐マス  
マスハヤサスラヒメトイフガミ

靈蓋鳥尊ノ別持佐須良比失氏牟○第四番ノ結局ニ其罪穢ヲ受取  
靈ノ神ガ

洗鼻因以生神号  
速佐須良比賣神  
與素戔嗚尊合力  
坐給也とあり執  
中抄引る伊勢  
國尾崎神社記に  
素蓋鳴尊御子也  
とあれど此は御  
子に非ず別魂と  
聞えたり云々  
○同云今按るに新  
庄道雄の大祓畧  
解といふものに  
天武紀に大祓用  
物云々祓柱馬一  
匹云々三代格に  
大祓料物云々馬  
一匹云々と見え  
たれば馬も祓物  
ふ出す事なれど  
も外物と同一千  
聖置座置物な

ねば取別て爰  
に引立る事を云  
るにや有む云々  
○按に三國の外今  
一國を後釋は  
京といひ史傳に  
は常陸といひ畧  
解に引ける龜相  
記には對島の上  
下二縣を分て各  
一國とすと云り  
○神祇令云凡六月  
十二月晦日大祓  
東西文部 謂東  
直西漢 漢文  
文直、上祓刀讀  
祓詞謂文部漢  
祓音所讀者  
也  
○學令云東西史部  
云々義解云謂居  
右、故曰皇城左  
也、前代以來奕  
世繼業爲史  
官、或爲博士因  
以賜姓總  
謂之史也、

如此久失氏波 ○斯様ニ行方モナスメラガミカドニツカヘマツル  
ク失タナラバ 天皇我朝廷爾仕奉

官官人等乎始 氏 ○天皇之朝廷ニ仕奉ル百官  
諸司ノ人等ヲ始メトシテ 天下四方

爾波 ○天下四方ノケフヨリハジメテ ○此大祓式執行ノ  
今日ヨリ始メテ 罪止云布罪

波不在 止 ○罪ト云フベキ罪穢ノ殘  
高天原爾耳振立聞

物止 ○高天原ト高ク耳ヲ振リ立テ、物ノ音ヲ聞物ナ  
馬牽立 氏 ○  
レバ天神地祇モ此祓ノ事ヲ速聞給ハン縁ト

出シ立セ置テ 今年六月晦日 ○今年ノ六月ノ  
月隱即晦日ノ 夕日之降

乃大祓 爾 ○夕日之降ノ時即 祓給比清給事 乎諸聞  
夕方ノ大祓式ニ

食止 宣 ○朝廷ヨリ祓給清給フ御事ヲ此處ニ集ヘル  
人々衆諸能ク聞取ラレヨト宣リ聞カス 四國卜部

等大川道 爾 持退出 氏 祓却 止 宣 ○伊豆壹伎對馬  
其外今一國ヨ

リ神祇官ニ仕奉ル卜部等祓柱ヲ大川道即罪ヲ流シ遣  
ル川道ニ持出シ罷向ツテ祓却レト宣リ聞カセ申渡ス

○東文忌寸部獻横刀時呪 皇居アル東方即大和國ナ  
ル姓ハ文尸ハ忌寸ノ部ガ

祓式ノ横刀ヲ奉 西文部准此 皇居ヨリ西方即河内史部ヨリ  
獻スル時ノ咒文

此文ひふぶるの漢文にて神名も皆漢國に稱おれは其出處を略解なきに引けるを略抄して次々に并べ舉べし○史記天官書云、中宮天極星、其一、之明者太一帝居正義云、泰一天帝、旁三星三公之別名○同正義云、三公三星云、爲太尉司徒司空之象、主下機務、○書洪範云、五紀四曰星辰、傳云廿八宿迭見以叙節氣○星經云司命司籍司危司非各一星、云々右各主三天下壽命爵祿安泰危敗是非之事、天官書云四曰司命六曰司籍索隱云司祿賞功進士司命主災害○老君中經云東王父者青陽之氣也云々在蓬萊山

**謹請** ○謹ミ畏テ次々ニ舉タル皇天上帝ヨリ四時四氣迄ノ神靈等ニ請祈ル ○此請字ハ四時四氣ノ句ヨリ還ル也 **皇天上**

**帝** ○天上ノ主宰タル皇天トモ上 **三極大君** ○大尉司徒司空ノ三公ノ象タル三台星

**月星辰** ○宇宙ヲ照ラス日ト月ト迭ニ見レテ氣節ヲ叙ヅル二十八宿ノ星辰 **八方諸神** ○乾兌離震巽坎艮坤

ノ八方ハ勿論諸方ニ有リトアル群神 **司命司籍** ○天下ノ壽命ヤ災害ヲ主リ爵祿ヲ以テ功ヲ賞シ士ヲ進ムル事ヲ主ルトイフ

**左東王父** ○左即チ東方ヲ治ル神靈ハ青陽之氣也ト云フ東王父右即チ西方ヲ

主ル神靈ハ太陰之氣也ト云フ西王母 **五方五帝** ○中宮太帝東宮蒼帝西宮白帝南宮炎帝

北宮玄帝ノ五帝春夏秋冬ノ四時ノ氣候ヲ司ルトイフ諸星ノ靈 **捧以銀人請除禍災** ○銀塗ノ人像ヲ

捧ゲテ禍災ヲ除ケン事ヲ請ヒ祈リ○金塗ノ人像モ捧ルナレド次句ニ金字有ル故省ル也 **捧以金刀請延帝**

**祚** ○金塗ノ横刀ヲ捧テ天子ノ御位ニ坐ス事幾千秋ナラン事ヲ請祈リ○銀刀モ捧クルナレド畧セル事上ニイヘルガ如シ **呪曰** ○別

呪文ヲ唱ヘ **東至扶桑** ○東ハ扶桑即皇國ヲ漢土ヨリ稱ンタル東方遠界ニ至ル迄 **西至虞淵**

西ハ日ノ没ル處ト云ヘル **南至炎光** ○南方ハ炎光ト稱スル極所迄 **北至弱水**

北方ハ弱水ト稱ス **千城百國精治** ○天下ノ千城百國何處モ何處モ能ク治マリテ **万**

十州記云、扶桑地方万里、上有太帝宮太真東王父所治之處也、○老君中經云、西王母者大陰之氣也、治崑崙之命城、○星經云、五帝內座在華蓋下、覆帝座也、○四時祭式云、金銀裝横刀二口、金銀塗人像各二枚、已上東西文部所預、○十州記云、扶桑地方万里云々、○淮南子云、日薄於虞淵、是謂黃昏、文撰吳都賦云、虞淵日所入也、○十州記云、崑崙在南海中、有火林、山、山中有火光、獸云々、○書禹貢云、導弱水、後漢書東夷傳云、夫餘國北有弱水、玄中記云、天崑崙之弱水、鴻毛

不能載之十  
州記云崑崙云々  
在西海之成地  
北海之亥地地  
方一万里有弱  
水

○神祇令云季夏鎮  
火祭義解云謂宮  
城四方外角  
卜部等鑽火而  
祭之爲防火災  
故曰  
鎮火  
○同云季冬鎮火祭  
○此氏もじは天下  
所寄奉志の句へ  
かゝる

### 歳万歳万歳

○万歳マデ平安ナレ万年  
モ安穩ナレト祈リ祝ス

### ○鎮火祭

大裏ノ外廊ノ四角ニ於テ六月晦日ト十二月晦  
日ニ火ヲ鑽リ改テ火災ヲ鎮メ遏ル所ノ祭事

高天原爾神留坐皇親神漏義神漏美能命

持氏○天上高天ノ原ニ神ト鎮テ御出遊マス天皇之親皇御孫命波

皇御眞之尊即々皇スミヤカノミコト豐葦原乃水穗國ホノクニ乎○豊ト美稱スベキ葦原安國止

立ノ初メ葦ノ多ク生タル原ナリシ故葦原ト稱ヒ稻穂ノ瑞トヤスクニ安國止

平久知所食止○無事靜謐ノ安國ト平カニ知シ看シ御天下所

寄奉志時爾事寄奉志○此ノ天下ヲ皇御孫尊ニ寄附シ奉リ

天都詞太詞事乎以氏申久○天之祝詞ノ太ト尊

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹背

二柱嫁繼給氏神ト奇靈ニ尊ク畏キ伊邪那岐伊邪那國乃

八十國島能八十島乎生給比○大數チイハバ八十

○按且神伊佐奈伎  
云々より事教悟  
給支までれ一段  
即太祝詞なり  
○講義云古事記に  
美斗能麻具波比  
とあり美斗は御  
處みて其下に久  
美度爾爲與而生  
子とある久美度  
は隱處にて夫婦  
隠り寝る身屋を  
云るみて此ニツ



共ニ彼八尋殿の  
用を云るなれば  
嫁繼の斗もそを  
云る事著けれを  
就處の義なる事  
いふもさらなり  
○万葉集七云人在  
者母之最愛子曾  
云々  
○史傳云火は萬物  
を産成す徳ある  
物なる故に此神  
を火産靈神とは  
申すあり

國々嶋々ヲ生  
出シ遊バサレ  
八百万神等  
乎生給比氏  
○大數ヲ以テ稱ハ  
八百萬トイフ

ベキ多クノ神々等ヲ  
御生ミ遊バサレテ  
麻奈弟子爾  
火結神生給氏  
○最末  
弟子

ニ火結神即火神ヲ  
御生ミ遊バサレテ  
美保止被燒氏  
石隱坐氏  
○御陰ヲ燒レ  
テ石室ノ中

ニ閉隠リ遊  
夜七夜晝七日吾  
乎奈見給比曾吾

奈妹乃命止  
申給支  
○夜數ハ七夜日數ハ七日ノ間我身ヲ御覽  
下サレナ吾之汝夫ノ命様ヨト伊佐奈伎

命へ御約束ヲ申シ給ヒケリ○夜七夜云々  
ヨリ奈妹乃命マテ伊佐奈美命ノ御詞ナリ  
此七日爾波不足氏○

此ノ御約束ノ七夜七日ト云  
日數ニハ未ダ足ラズシテ  
隱坐事奇止氏見所行  
須

時  
○伊佐那伎命様ガ伊佐奈美命様ノ常ニ替ツテ斯ヤウニ隠リ籠リ坐  
ス事ハ奇怪イ事ヤトテ遂ニ其隠リ坐セル石室内ヲ御覽ズル時ニ  
火

乎生給氏御保止乎所燒坐支  
○前ニ火結神即火ヲ  
御生ミサレシニ因

テ御陰ヲ燒レテ  
御出ナサレケリ  
如是時爾  
○斯ヤウニ御覽  
ナサレタ時ニ  
吾名妹乃命能○

吾之汝夫之御事即  
伊佐奈伎命様ガ  
吾乎見給布奈止申乎吾乎見阿

波多志給  
止比津申給氏  
○我ヲ御覽下サルナト申上テ置タ  
ノニ其約束ヲ用給ハズ我ヲ御覽

○按に伊佐奈伎命  
は女神の御陰を  
焼れ給ひし事を  
此時始て知看し  
、なり然ば上の  
美保止被燒氏は  
地の詞にて伊佐  
奈美命の御身に  
つけていひ此處  
の御保止乎所燒  
坐支之伊佐奈伎  
命の御上にか、  
りくいへるあり  
○講義云あはさす  
は劇しく不意よ  
り出て人を驚す  
意にてそれ阿波  
とアハメ悪ムな

この阿波にて物の見劣りするやうの言也云々  
○今按に阿波は淡薄をアハハといふ類の阿波にて意を用ひず物を輕し侮る意多志とハタシ、ヒタシ、ミダシ、ワタシなどの多志にて佐行四段の活語なるべし

シ輕シ侮リナサレタ事ヨト御申ナサレテ○此ハ伊佐奈美命ノ御怨言ナリ  
吾名<sup>アガナセ</sup>妖<sup>セ</sup>能<sup>ノ</sup>命<sup>ミコト</sup>波<sup>ハ</sup>上<sup>ウ</sup>津<sup>ツ</sup>國<sup>クニ</sup>

乎<sup>チ</sup>所知<sup>シロシメ</sup>食<sup>メ</sup>倍<sup>ベ</sup>志<sup>シ</sup>吾<sup>ア</sup>波<sup>ハ</sup>下<sup>シタ</sup>津<sup>ツ</sup>國<sup>クニ</sup>乎<sup>シ</sup>所知<sup>ラ</sup>牟<sup>ム</sup>止<sup>ト</sup>白<sup>マ</sup>氏<sup>チ</sup>○

吾<sup>アガナセ</sup>汝<sup>セ</sup>夫<sup>ノ</sup>尊<sup>ミコト</sup>ハ黄<sup>ヨ</sup>泉<sup>ミ</sup>ヨリ指<sup>サ</sup>セバ上<sup>ウ</sup>之<sup>ノ</sup>國<sup>クニ</sup>ナル此<sup>コノ</sup>ノ顯<sup>ウツクシク</sup>國<sup>クニ</sup>ナ是<sup>コト</sup>迄<sup>マデ</sup>通<sup>ト</sup>リニ領<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>メスベシ我<sup>ワ</sup>ハ此<sup>コノ</sup>國<sup>クニ</sup>ヨリ指<sup>サ</sup>セバ下<sup>シタ</sup>之<sup>ノ</sup>國<sup>クニ</sup>ナル黄<sup>ヨ</sup>泉<sup>ミ</sup>國<sup>クニ</sup>ヲ所<sup>シ</sup>治<sup>ル</sup>ント御<sup>ミ</sup>申<sup>ス</sup>シナサレテ○此<sup>コノ</sup>ハ伊

佐<sup>サ</sup>奈<sup>ナ</sup>美<sup>ミ</sup>命<sup>ノ</sup>男<sup>ヲ</sup>神<sup>カミ</sup>ノ垣<sup>カイ</sup>間<sup>マ</sup>見<sup>ミ</sup>テ耻<sup>ハジ</sup>給<sup>ケ</sup>ヒテ今<sup>イマ</sup>ハ男<sup>ヲ</sup>神<sup>カミ</sup>ト一<sup>ヒト</sup>國<sup>クニ</sup>ニ相<sup>アイ</sup>住<sup>ス</sup>テ御<sup>ミ</sup>面<sup>オモ</sup>石<sup>イハ</sup>隱<sup>カクリ</sup>ヲ合<sup>ア</sup>ハセ奉<sup>ホウ</sup>リ難<sup>ガタ</sup>シ黄<sup>ヨ</sup>泉<sup>ミ</sup>國<sup>クニ</sup>ニ別<sup>ワ</sup>レ去<sup>ク</sup>ラントテ申<sup>ス</sup>シ置<sup>キ</sup>給<sup>ケ</sup>フ御<sup>ミ</sup>詞<sup>コトバ</sup>ナリ

給<sup>タマ</sup>氏<sup>ヒテ</sup>○更<sup>マ</sup>ニ石<sup>イハ</sup>構<sup>カマ</sup>ノ内<sup>ウチ</sup>ニ奥<sup>カウ</sup>與<sup>ユ</sup>美<sup>ミ</sup>津<sup>ツ</sup>枚<sup>ヒ</sup>坂<sup>サカ</sup>爾<sup>ニ</sup>至<sup>イ</sup>坐<sup>イ</sup>氏<sup>マシ</sup>所<sup>オモ</sup>

思<sup>ホシ</sup>食<sup>メ</sup>久<sup>ク</sup>○此<sup>コノ</sup>國<sup>クニ</sup>ト黄<sup>ヨ</sup>泉<sup>ミ</sup>トノ界<sup>カイ</sup>ナル黄<sup>ヨ</sup>泉<sup>ミ</sup>之<sup>ノ</sup>平<sup>ヒラ</sup>易<sup>ヤカ</sup>坂<sup>サカ</sup>ト云<sup>イ</sup>坂<sup>サカ</sup>路<sup>ヂ</sup>ノ處<sup>ト</sup>ニ至<sup>イ</sup>リ坐<sup>マ</sup>テ御<sup>ミ</sup>心<sup>ココロ</sup>ツカレテ思<sup>オモ</sup>シ召<sup>メ</sup>スハ吾<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>妖<sup>セ</sup>能<sup>ノ</sup>命<sup>ミコト</sup>

能<sup>ノ</sup>所<sup>シ</sup>知<sup>シ</sup>食<sup>メ</sup>上<sup>ウ</sup>津<sup>ツ</sup>國<sup>クニ</sup>爾<sup>ニ</sup>心<sup>ココロ</sup>惡<sup>ワルシ</sup>子<sup>コ</sup>乎<sup>チ</sup>生<sup>ウ</sup>置<sup>ミ</sup>氏<sup>キ</sup>來<sup>キ</sup>奴<sup>ヌ</sup>

止<sup>ト</sup>宣<sup>ノ</sup>氏<sup>ヒテ</sup>○吾<sup>アガナセ</sup>汝<sup>セ</sup>夫<sup>ノ</sup>尊<sup>ミコト</sup>ノ所<sup>シ</sup>知<sup>シ</sup>食<sup>メ</sup>上<sup>ウ</sup>之<sup>ノ</sup>國<sup>クニ</sup>ニ御<sup>ミ</sup>稜<sup>レイ</sup>威<sup>イ</sup>銳<sup>エツ</sup>ク健<sup>タカ</sup>ク剛<sup>コウ</sup>クテ神<sup>カミ</sup>性<sup>セウ</sup>ノ畏<sup>オソ</sup>口

仰<sup>ウ</sup>セラ返<sup>カ</sup>坐<sup>ヘリ</sup>氏<sup>マシ</sup>○更<sup>マ</sup>ニ生<sup>ウ</sup>子<sup>ミ</sup>○平<sup>ヒラ</sup>坂<sup>サカ</sup>ヨリ引<sup>ヒツ</sup>返<sup>カ</sup>シ御<sup>ミ</sup>還<sup>マ</sup>リ遊<sup>アソ</sup>バ水<sup>ミヅ</sup>神<sup>ノ</sup>カミ

菟<sup>ヒ</sup>川<sup>カ</sup>菜<sup>ゴ</sup>埴<sup>カ</sup>山<sup>ハ</sup>姬<sup>ナ</sup>四<sup>ハ</sup>種<sup>ニ</sup>物<sup>モノ</sup>乎<sup>チ</sup>生<sup>ウ</sup>給<sup>ケ</sup>氏<sup>ヒテ</sup>○水<sup>ミ</sup>神<sup>ノ</sup>岡<sup>ノ</sup>象<sup>ノ</sup>女<sup>メノ</sup>神<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>チ

葛<sup>ツ</sup>水<sup>ノ</sup>チ能<sup>ク</sup>含<sup>フ</sup>物<sup>モノ</sup>ナル水<sup>カ</sup>苔<sup>ハナ</sup>土<sup>チ</sup>神<sup>ノ</sup>埴<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>姬<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>此<sup>コノ</sup>ノ四<sup>ハ</sup>種<sup>ノ</sup>物<sup>モノ</sup>即<sup>チ</sup>此<sup>コノ</sup>能<sup>ク</sup>心<sup>ココロ</sup>惡<sup>ワルシ</sup>子<sup>コ</sup>

乃<sup>ノ</sup>心<sup>ココロ</sup>荒<sup>アラ</sup>波<sup>ハ</sup>比<sup>ヒ</sup>曾<sup>ソ</sup>○此<sup>コノ</sup>ノ健<sup>タカ</sup>ク畏<sup>オソ</sup>ク心<sup>ココロ</sup>惡<sup>ワルシ</sup>キ子<sup>コ</sup>ノ心<sup>ココロ</sup>ノ暴<sup>アラ</sup>動<sup>ウ</sup>ビ水<sup>ミヅ</sup>神<sup>ノ</sup>菟<sup>ノ</sup>

○按に生子を正訓にミコウミタマフと訓めれどマハクと訓む方古例に合へり  
○神代紀一書云伊奘冉尊生火産靈時爲子所焦而神退矣其且神退之時即生水神罔象女及土神埴山姬又生天吉葛考云川菜は和名

鈔に水苔一名河苔和名加波奈と云り今も水苔といふ物ありて水を能く含む物故植木の根を此苔して纏ひて遠所にやるあり云々  
埴山姫は凡ての土なす植生をたもつ神みて壁塗籠して火を備る方也云々

此波もじ次々の氏もじ二にか、れり

埴山姫川菜乎持氏鎮奉禮止事教悟給支○

水神ハ水ヲ汲ムベキ匏埴山姫ハ水ヲ含メル川菜ヲ執持テ火神ノ荒ビヲ鎮メ止メ奉レト其ノ行事ヲ伊邪那美命ヨリ水土ノ二神ヘ教ヘ諭シ教ヘ授ケ給ヒ

依此氏稱辭竟奉者○此御故事ニ因リテ鎮火祭ヲ執行シ稱辭ヲ竟盡シ奉タナラバ皇

御孫能朝廷爾御心一速比給波志爲氏○皇御

孫即天子ノ朝廷ニ對シテ火神ノ御心勇進ダテマツルモノハ波○其鎮火祭ノ幣物トビ給ハシ暴ビ給フ事ハ有ルマイト致シテ進物御前ニ進呈ル物ハ

明妙照妙和妙荒妙五色物乎備奉氏○明ト色ノニホ

青海  
ヘル織物照ト澤ノ光レル織物和ト絲細ニ織レル絹荒ト絲太ニ織レル布ノ青黃赤白黒ノ五色ニ染ナセル物ヲ不足モナク備ヘ奉ツテ

原爾住物者○緒廣物緒狹物奥津海菜邊

津海菜爾至爾○蒼々タル大海ニ住居ル物ハ緒ノ廣イ大魚緒ノ狹イ小魚澳深ク生ズル海菜類渚近ク

生ズル海菜類御酒者○御酒ニ至ルマデモ

和稻荒稻爾至爾○十分ニ滿テ其甕ヲ幾何モナラベテ

和稻即々米荒稻即如横山置高成氏○横タハレル山ナドノヤナ叔ニ至ルマデモウニ祭場ニ置高ナシテ

天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭竟奉久止

申○皇御孫命御天降ノ時高天原ニテ神漏岐神漏美ノ御傳遊サレタル天  
之祝詞ノ太貴キ祝詞辭ヲ用テ此ノ如ク稱辭ヲ竟ヘ盡シ奉ルト白ス

○道饗祭 内裏ノ外廓即外重ノ四隅ノ道上ニテ六月晦日  
ト十二月晦日ニ疫神惡鬼ナドヲ廓内ヘ入レシ

トテ本文ニ言ヘル如ク衢  
神ト久那止神トヲ祀ル祭

高天之原爾事始氏○天上高天原ニ於テ此祭ノ  
皇御孫

之命止稱辭竟奉○皇御真之御事即皇孫邇々藝尊ヨリ御教ヘ  
傳ヘ遊バシタ御命令トテ後代マデ如此ク

○神祇令云季夏道  
饗祭、義解云謂  
京城四隅道上  
而祭之、言欲令  
鬼魅自外來者  
不敢入、京師、  
故豫迎於路、  
而饗也、  
○同云季冬道饗祭

○此氏もじを稱辭  
竟奉の語へかけ  
て見るべし又止  
はトテの意なり

稱辭竟奉ヲ祭 大八衢爾 湯津磐村之如久 塞坐皇

神等之前 爾申久 ○大八衢即大道ノ彌ト幾筋ニモ別ル、道股ノ  
處ニ湯津ト數多キ磐群ノ堅固ナルガ如ク守

護ノ神靈ノ滿塞リテ塞仕テ御出ナサ 八衢比古八衢比賣久

那斗止御名者申氏 辭竟奉久 波 ○彌道股靈男ノ義彌道  
股靈女ノ義勿來處ノ

義ナル三神ナ八衢比古八衢比賣久那斗 根國底國 與里 麤備 疎

備來物 爾 ○世間ノ禍災ノ起原タル 根國底國即テ黃泉 相率相口

○古事記云、爾千引  
石引塞其黃泉比  
良坂、云々亦所  
塞其黃泉坂之石  
者、号道反大神、  
亦謂塞坐黃泉戶  
大神、  
○同云、於投棄御杖  
成神名、衝立船戶  
神、  
○神代紀云、投其杖、  
是謂岐神、岐神此  
斗能、云布那  
加微  
○同云、投其杖曰白  
此以還雷不敢來、  
是曰岐神、此本々  
号來名、戶之祖神  
焉、  
○按に正訓、口會  
事をクシアヘタ

マフコトと訓た  
れ此處にてこ  
タマフの敬言は  
省くべき事なり  
又アフはアハス  
の約言と心得べ  
し

此の止もじにて  
根國底國云々よ  
り此處までの天  
津祝詞の古語を  
當日の語につ  
けたり

會事無氏上ノ三神ガ此ヨリ彼ニ相交凝リ相合口事ナシシタヨリユカバ  
テ彼ノ惡事凶言ニ同意シ合体スルコト無クテ下行者

下乎守理上往者上乎守理夜之守日之守

爾守奉齋奉禮止○兇神ガ地下ヨリ通ヒ來ナバ地下ヲ守リ邪鬼ガ  
地上カラ通リ來ナバ地上ヲ守リ夜ノ間ハ夜ノ

守リ晝ノ間ハ晝ノ守リニ間斷ナク天子様ノ城廓ノ内外ヲ堅固ニ守リ奉リ禍  
災ヲ忌避ツ齋ヒ護リ奉レト○上ノ根國底國云々ヨリ此處マデハ下ニ天津

祝詞ト指セ進幣帛者明妙照妙和妙荒妙爾備

奉御衣服ノ料ト色ノ美ク明絹澤ノ清ク照絹御酒者聽邊高知

聽腹滿雙氏汁爾母穎爾母御酒ハ獲之口ナ高ク灼居エ獲

ト酒ニテモ穎山野住物者毛能和物毛能荒物

山間野邊ニ住居ル物ハ毛ノ柔イ青海原住物者鰭乃廣

物鰭乃狹物奧津海菜邊津海菜爾至萬氏

蒼海ノ渺々タル處ニ住メル物ハ鰭ノ廣イ大魚鰭ノ狹イ小横山之如

久置所足氏進字豆乃幣帛乎平氣久聞食

此爾母ハ次の句  
をも隔て、置  
所足氏進といふ  
句へつゝくなり

此氏もじ之句を  
隔て、皇御孫命  
の句へかゝる

氏テ○横コタハレル山カナドノヤウニダクサンニ置キ足ラハセテ獻上スル  
珍ツト清ク美シキ幣物ヲ御心ノ内ニ平ラカニ聞シ食シ御享ナサレテ  
大オホ

八衢ヤチマタ爾ニ湯津磐村之如久サヤリマシテ塞坐サヤリマシテ氏ノ○内裏ノ外重即外  
郭外ノ大彌道股

ニ湯津ト數多ノ磐群ノヤウニ御神靈ガ  
横ハリ塞在テ御出ナサレツ守マシテ  
皇御孫命乎堅磐爾

常磐爾トキハニ齋奉茂御世爾イハヒマツリイカシノミヨ幸閉奉給止申サキハマツリタマヘトマチス  
○皇御真之御事ノ御

名義ニマシマス天子様ヲ堅磐ノ如クニ常磐ノ如クニ凶ヲ忌ミ  
又親王  
テ吉ニ護ヒ奉リ大盛之御壽命ニ幸ハヘ奉リ下サレト祈請申ス

王等臣等百官人等天下公民爾オホキミタチオミタチモ、ノツカサノヒトダチアメノシタノオホミタカラコ至イタルマデ萬マダ氏ミコ○

○此處は天津祝詞  
といふは上の根  
國底國云々より  
守奉齋奉禮まで  
の一段を指せる  
事既にいへるの  
如し

○神祇令云仲冬下  
卯大嘗祭義解云、  
三卯者、以中卯  
爲祭日、不更待  
也、  
○同云凡天皇即位、  
惣祭天神地祇、義  
解

平久齋給部ダヒラケクイハヒタマ止ト○又皇族ノ第一等タル親王等第二等タル王等朝廷  
大臣等百官即官省寮司等ニ奉仕スル官員等天

下中ノ百姓ニ至ルマデモ平ラオホミタカラ神官天津祝詞乃太祝詞カムツカサ  
ケク無事無難ニ守護下サレト

事乎以氏稱辭竟奉止申ゴトチ○神官即今此ノ道饗ノ祭典掛チ  
ル神祇官ノ卜部ガ天之祝詞ノ

太ト尊キ祝詞言チ以テ稱賛  
辭チ竟ヘ盡シ奉ルト申ス

○大嘗祭オホニマツリ大嘗トハ上代ノ稱ヲ用テ題セル毎年  
十一月中卯日ニ神祇官斑幣ノ新嘗祭

集侍神主祝部等諸聞食登宣ウゴナハレルカムスシハフリドモモロモロキコシメセトノル  
○ウゴナハリテ居ル新  
嘗祭ノ斑幣ニ預ル諸

云、謂即位之後、仲冬乃祭、下條、所謂大嘗、每世一年、國司行、事是、同云、凡大嘗、每世一年、國司行、事、以外、每年所、司行事、義解云、者在京諸預、祭事者也、四時祭式云、新嘗祭、奠幣案上、神三百四座、並社一百九十八座、云々、前一百六座、云々、右中卯日、於此官齋院、官人、行事、諸司不、但、頌幣及造供、神物料、度、中臣祝詞、料、准、月次祭、考、云、まづ上代に、大嘗新嘗といふ、別ちなし云々、後釋云、こ、と、毎年の祭の内なれば、毎年、大嘗なる事は、論なれを、新嘗と顯はさず

して大嘗と題されたるも古の唱あれば難はなし、記傳云、爾閉は新嘗を約めたるも、て新嘗を以て饗するをいふ名なり云々、中臣壽詞云、中都卯日、此の故、爾の爾も、じは次の句ども、をわまた隔て、皇御孫命能、宇豆乃幣帛といふへか、るなまよく、せすはまぎれぬべし、字豆乃比奉、氏の、氏もじは奉、半依、志といふ語まで、へか、れり其下へ、と及ばず

社ノ神主祝部等諸人能ク聞シ食シ心得ラレヨト先ノリ聞カス○此處ニテ神主祝部等ノ唯ト返答スル式ナルヲ祈年祭ノ條ヲ見テ知ルヘシ

高天原 爾 神留坐皇睦神漏伎神漏彌命

以 上天ナル高天原ノ神境ニ神ト尊クモ靈德ミナミナテ鎮在座マス天皇之親トマシマス神之男君神之女君ノ御命令ヲ以テ仰付ラレシマムニ

天社國社 登敷坐留 皇神等前 爾 白久 天神ハ天之社

地祇ハ國之社トソレソレニ舍代ノ地ヲ占メテ其社ヲ領知テ御出ナサル皇ト尊キ神々等ノ前ニ白ス 今年十一月

卯日 爾 今年ノ十一月ノ中之外日即チ第 天都御食 乃 長御

食能遠御食 登 天照大御神ヨリ皇孫尊へ御依遊サレシ御膳ヲ天之御膳ノ長トモ遠トモ永久ニ召上ルベキ御膳ト遊バ

皇御孫命乃 大嘗聞食 牟 爲故 爾 皇御眞之御事即 天子様ガ今日大

嘗即チ大ト尊ブベキ新饗ヲ聞召シ 皇神等相字豆乃比奉 召上リ遊バサウトスル 爲ノ其故ニ

氏 皇神等ガ天子ノ思召ヲ受納シ 堅磐 爾 常磐 爾 齋比奉 承引シ相ヒウヅノヒ奉リテ

茂御世 爾 幸 閉奉 牟 止 依 志 氏 天子様ヲ堅磐ノ如クニ 常磐ノ如クニ守護奉リ

大盛之御壽ニ幸ハへ奉ラントテ皇 千秋五百秋 爾 平 久 安 神ヨリ皇御孫尊へ稻穀等ヲ寄之テ

久シ聞食キコシメシ氏テ○其ノ依ヨサシタル稻穀チヲ千秋チ五百秋イト千万秋ホト豊明ト爾コ

明坐アカリマサム牟スメ皇御孫命マノミコトノ能ウ宇豆ヅ乃ノ幣帛ミテグラ乎チ○豊ト十分ニ御面ミオモノ赤ニ

天子メツ召上リ遊バサントスル皇御孫尊ミ即アカルタヘテルタヘニギタヘアラタヘハク天子ノ宇豆ト珍貴ヲ極メタル幣物ヲ明妙照妙和妙荒妙

爾ニ備奉ツナヘマツリテ氏○色ノ美シク明ル絹ノ清ク照ル絹ト精シキ朝日

豊ト榮登サカノホリニ爾ダ、ヘ稱辭竟奉ヘマツラシク乎チ諸聞食モロモロキコシメセト宣ノ○當ノ旭ル

ノ豊ト榮エ上ル時刻ニ稱ズ辭ヲ竟ヘ盡シ奉ルト白ス事ヲ諸人ヲ聞召シ取ラレヨト宣リ聞カス

事別コトワケテ○又別ニ詞ヲ別ロイミベノ忌部ノ能ヲ弱肩ガタ爾ニ太禰取挂フトダスキトリカケ氏○

齋部齋部即チ神祇官ノ神部ノツガヒ持由麻波利仕奉ユマハリシツカヘマツレ幣ル

帛グラ乎○持ト十分ニ齋清リテ調カム神主祝部等スシハフ請ドモウケタマハリテ氏○此ノ參集セル

神主祝部等コトオナズサ、ゲ事不落捧持ヲ氏奉登宣○遺漏ノ事ヲクサシ舉受ケ被賜テ

聞カス

○鎮御魂齋戶祭ミダマチイハヒドニシヅムルマツリ十一月ノ鎮魂祭ニ式ノ如ク鎮メ奉レル天子ノ御魂ヲ十二月ニ更ニ神祇官

○考云四時祭式に十二月鎮魂齋戶祭云々右於官齋院中臣行事と云り此神祇官の齋



院を齋戸といふ  
清和天皇紀に神  
祇官の西院齋戸  
神殿とあり是即  
八神を齋奉る所  
なり云々

講義云四時祭式  
云々此條の末に  
右於此官齋院中  
臣行事云々彼鎮  
魂祭之御魂を招  
殖す神事此齋戸  
祭は其鎮魂祭に  
結びたる御魂緒  
を齋戸に鎮祭る  
にて云々十一月  
宮内省にて行は  
る、鎮魂祭の魂  
筥を十二月に當  
て神祇官齋院に  
鎮め替るなむ此

齋戸祭には有る  
べき然思ふよし  
は三代實錄に貞  
觀二年秋七月廿  
七日甲辰偷見開  
神祇官西院齋戸  
神殿盜取三所齋  
戸御衣並主上結  
御魂緒等とある  
にて魂匣を收奉  
所在なる事著明  
けれなり云々  
同云下津磐根云  
々此は彼神祇官  
西院坐御巫祭神  
八座の鎮坐す宮  
居の事也云々  
按に此祝詞の詞  
つゝさかにも  
いふのしきさま  
なる事考畧解な  
るに云々の如

ノ西院即齋處ト稱スル  
八神殿内へ鎮メ奉ル祭  
**中宮春宮齋戸祭亦**

オナジ  
**同** 皇后皇太子御所ノ齋戸ノ  
祭モ同シ様ニ執行ヒ奉ル

高天之原爾神留坐須皇親神漏伎神漏美

能命乎以氏  
高天原ノ幽界ニ神ト御鎮坐遊ハス天皇之親神之男  
君高皇產靈尊神之女君天照大御神ノ御命令ヲ以テ

皇御孫之命波豐葦原能水穗國乎安國止

定奉氏  
皇御孫尊ハ豐ト美稱スル葦原之瑞穂國即大日本國ヲ安國ト  
治メサレヨト定メ奉ラレテ○此ノ氏字ハ他ノ例ト別ニテ下

下津磐根爾宮柱太敷立

高天之原爾千木高知氏天之御蔭日之御

蔭止稱辭竟奉氏  
此神祇官西院ノ八神ノ齋處ノ爲メニ地下  
之岩ニ深く掘リ入レテ其柱ノ太キガ如ク

知キ坐ベク宮柱ヲ立テ高天原即御空ニ高ク千木ヲ擧ゲテ其千木ノ高キガ  
如ク其宮ヲ知領シメ奉リサテ其宮ヲ天ヲ蔽フ眞蔭ヨリ日ヲ遮ル眞蔭ヨリ稱

辭ヲ竟ヘ盡奉御衣波上下備奉氏  
奉ル御衣服ハ上ハ即  
御衣下ハ即御禪御裳

等ヲ取リ揃字豆乃幣帛波明妙照妙和妙荒妙

くなるを今とた  
い本文をさすけ  
て解せりそは講  
義の説もあれば  
しむらくそれに  
従てなり

五色物 イツイロノモノ ○珍貴ノ幣帛ハ明ト色ノ美シキ絹照ト光ノ清キ絹御酒波 精シキ和布粗キ荒布青黄赤白黒ノ五色ノ絹布類

貳邊高知貳腹滿雙氏 ミカノヘタカシリミカノハラミテナラベテ ○神酒ハ獲之口高ク居エ山野物 獲之腹ニ滿タセ並ベテ

波甘菜辛菜 ハアマナカラナ ○山ヤ野ニ生ル物ハ味ノアチミハラノモノハハタノヒロ 甘イ菜類味ノ辛イ菜類 青海原物波 齋廣

物齋狹物奥津海菜邊津海菜 爾至 モノハタノサモノオキツモノハツモノハニイタルマデニ 爾氏○

蒼海ノ物ハ齋ノ廣イ魚齋ノ狹イ魚澳深ク生ス ツサグサノモノチヨコヤマノゴトク 雜物乎如横山 ル海草類邊ニ近ク生スル海草類ニ至ルホドニ

置高成氏獻留字豆乃幣帛乎 オキタカナシテタマツルウヅノミテグラチ ○種々ノ幣帛神饌ヲ横山ノヤウニ御前へ置

高クシテ奉ル此結安幣帛能足幣帛止平久聞食 チ高クシテ奉ル此結ヤスマミテグラノダリミテグラトタヒラケクキコシメシ

氏○御心ニ安ク思召ス幣物ノ満足ナル皇良我朝廷乎 チ○ミココロ幣物ヨト平穩ニ御享ケナサレテ 皇良我朝廷乎 ○天皇之朝廷即天子

皇太子ヲ常磐爾堅磐爾齋奉○茂御世爾幸閉 様又中宮トキキハニカキハニイハヒマツリイカシノミ

奉給氏○常磐ノ如ク堅磐ノ如クニ護ヒ奉リ茂自此十二月 マツリタマヒテ ○常磐ノ如ク堅磐ノ如クニ護ヒ奉リ茂イカコノシハスヨリ

始來十二月爾至 ハシメテキタラムシハスニイタルマデニ 氏○今年ノ十二月ヨリ始マリテ來ン年ノ十二月ニ至ルマデ

平久御坐所令御坐給止 ダヒラケクオホマシマストコロニオホマシマサシメタマヘト ○八神等ノ大坐マス此ノ齋戸ニ天皇様又中宮皇

太子ノ御魂ヲ平ラケク  
大坐マサセ下ダサレト  
今年十二月某日齋比鎮奉

トマチス  
止申  
○今年ノ十二月ノ何日ノ日ニ十一月ノ鎮魂祭ニ結奉タ  
天子又中宮皇太子ノ御魂筥ヲ如此鎮メ奉ルト申ス

延喜式詞祝諺解卷之中 畢

